

学位論文題名

# 日本で学ぶアジア系外国人

—研修生・留学生・就学生の生活と文化変容—

## 学位論文内容の要旨

本論文の課題は、現代日本で学ぶアジア系研修生・留学生・就学生、及び、受入側日本人を対象として、諸個人のミクロな「文化変容（acculturation）」と世界社会のマクロな構造変動・転換を貫く内在論理・連環を解明することにある。

国境を超えた人口移動は、世界社会の巨大な転換期につねに現れ、またその転換を推進してきた。それは、世界史的な社会構造変動の把握にとっても、またその渦中で創り出されつつある新たな人間類型・パーソナリティの理解にとっても、不可欠かつ絶好の研究対象である。国境を超えて移動する人々は、自らの「生命—生活（life）」をかけて、世界社会システムの中核—周辺の対立・格差、及び、それを枠づける国民国家・民族文化の異質性を体験し、従来、自らが自明のものとしてきた文化・社会・人間認識を問い直し、自己を内在的に変貌させる。

今日、世界—日本社会は巨大な転換の渦中にある。日本で専門知識・技術・日本語を学び、低賃金労働者として働き、様々な階層の日本人と接する中で差別と協働を体験し、母国と日本の歴史・政治・経済・社会・文化を比較・再認識し、そして自らの将来を展望するアジア系研修生・留学生・就学生の生活と文化変容には、新たな世界—日本社会の転換と主体変容の多様な道筋が刻印されている。

本論文は、3部構成をとっている。

### 【第1部 問題提起】

アジア系研修生・留学生・就学生の文化変容と世界社会の構造変動の連環を解明するにあたり、①現代世界—日本社会の基本構造とその変動・転換のパースペクティブ、及び、②諸個人のミクロな文化変容とマクロな社会構造変動の連環を把握するための方法論・概念装置を予め提示しておく必要がある。そこでまず第1部第1章「歴史—社会観の再検討」では、「一国単位の近代化（及びその彼方の社会変革）」といった歴史—社会観を批判的に検討し、多国籍企業化と「地球的問題群」に象徴される1960年代以後の世界社会の転換の基本構造、及び、その一環としての日本社会の構造転換の特質を明らかにした。そこでは特に、「先進」諸国と第三世界の双方において、「一国単位の『現代化』（反封建・近代化ではない反独占資本主義としての自立的・内発的発展）」と国際連帯、及び、国民国家を相対化した世界社会変動・変革の両面において、諸個人の生活の矛盾に根差す文化変容と社会構造変動の実態が解明されなければならないことを強調した。また第2章「方法論・概念装置」では、1960年代以後の構造—機能主義の克服を目指す理論諸潮流を批判的に検討し、「主体—環境／主観—

客観」を切り離さず、しかも社会を関係性ではなく「生命－生活」の重層として把握する社会環境論的視角を提起し、さらにそれを実態調査・分析レベルにおろした方法的枠組として生活過程論－文化変容論を提起した。その上で第3章では、現代日本における外国人研修生・留学生・就学生の特徴を概観するとともに、それらに関する先行研究を批判的に総括した。

## 【第2部 生活誌分析】

第2部では、アジア系研修生・留学生・就学生と受入側日本人の生活と文化変容に関する実態調査結果を分析した。本研究の素材となった調査は、1989年～94年、北海道・首都圏・阪神圏、及び、中国の北京市・瀋陽市・大連市等で実施した。調査対象は、日本で学ぶアジア系研修生・留学生・就学生（計102名）、及び、彼らの研修・アルバイト就労先の企業・農家の日本人（計22名）である。研修生・留学生・就学生の国籍は、中国（77名）が最も多く、韓国・インドネシア・マレーシアを含む。

本調査研究は、生活誌分析・モノグラフ法に基づく。諸個人のトータルな生活過程と“生きた文化変容”の内実、及び、それらと社会構造変動との内的連環を捉えるという本書のテーマには、予め設定した質問に対する回答を量的に分析する大量観察・定量分析はなじまない。そこで主要には、インテンシブな面接聞き取り、及び、職場・地域・住宅・学校での参与観察という方法を採用した。また特徴的な事例（31名）については、約6年間にわたり、継続的に追跡調査した。

第2部では、①研修生・留学生・就学生の来日前の基本属性と生活史（第1章）、②来日後の学習－労働－生活過程（第2章・第3章）、③社会諸関係の構造と変容（第4章）、④異文化葛藤（第5章）、⑤国家－社会認識とその変容（第6章）、⑥人生観と将来指向の変容（第7章）、⑦受入側日本人の文化変容（第8章）について、客観的－主体的な特徴と矛盾の所在を明らかにした。研修生・留学生・就学生及び受入側日本人は、国籍・属性毎に異なる形で、しかしいずれも自らの「生命－生活」の再生産を基礎においた形で、様々な社会諸関係を培い、多様な文化変容を遂げていた。

## 【第3部 考察】

研修生・留学生・就学生の文化変容とマクロな社会構造変動は、自覚的・意図的レベルのみで連鎖しているわけではない。また彼らの実際の生活と文化変容は矛盾に満ちている。そこで第3部では、外面に表出された可視的特徴、及び、彼ら自身が重要だと自覚している事柄をそのまま記述するにとどまらず、彼らの言動の基礎にある暗黙の認知枠、及び、それと社会構造変動との関連にまで踏み込んで考察を深めた。

考察の視点は、以下の3つである。第1は、「専門性」とその修得である（第1章）。研修生・留学生・就学生において「専門性」の修得は文化変容の重要な一環をなし、従ってまたその修得と発揮は彼らの生活の発展的再生産と社会構造の変動・変革への関与において重要な役割を果たす。ここでは、ユニバーサルな真理を求める理工学系、国際的な理解を追求する人文社会科学系、個性的・総合的な地域の自然に密着した農業・農学系、コスモポリタンとして生きる手段としての専門学校系、階級・階層の世代的再生産の手段としての一部の研修等、多様な「専門性」修得の実態とその意義が浮き彫りとなった。第2は、相互行為・異文化接触に伴う文化変容である（第2章）。ここでは、言語・文化習慣等の違いにとどまらず、労働観・人間関係観・国家－社会観、そして生きる目的・人生観等のレベルにおり、しかもナショナリティと階級・階層・世代・性差等に基づく文化的差異の輻輳の構造を明らかにした。またそれを通して、ナショナリティの再生産と変容の過程、及び、文化的「適応」と民族差別のメカニズムを解明した。第3は、「専門性」の修得や異文化接触に限定

しえないトータルな「生命－生活」再生産の全過程（生活史－将来展望を含む）との関わりで、彼らの国家－社会観とその変化という側面での文化変容を考察した（第3章）。そこには、一国単位の「現代化」を担う広義のナショナリズム、ユニバーサリティ、インタナショナリズム、コスモポリタン、内発的発展を担う広義の地域主義等々、既存の国家－社会と諸個人の多様な関わり方が属性毎に異なる形で看取しえた。しかもそれらの諸要素はいずれも、現実の世界社会の中で「周辺」と位置づけられた諸国民・諸民族・諸階級の生活の発展的再生産を機軸に据え、「現代化」を実現する強力な国民国家の必要性と国家の枠組にとらわれない自由な諸個人への指向性をめぐるジレンマの多様な発現形態でもあり、それだけに国籍や属性の違いを超えて相互に理解・共有可能な側面も存していた。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 小 林 甫  
副 査 助 教 授 小 内 透  
副 査 助 教 授 陳 省 仁  
副 査 教 授 関 孝 敏 (大学院文学研究科)

## 学 位 論 文 題 名

### 日本で学ぶアジア系外国人

#### —研修生・留学生・就学生の生活と文化変容—

I) 本研究は、1989～94年の間に行われた中国人、韓国人、インドネシア人、マレーシア人の研修・留学・就学生に対する、面接・参与観察・追跡調査の結果を主な素材とし、日本人の研修生受入の企業担当者・農家世帯主、就学生の雇用企業主からの聞き取りを加えて、個人のミクロな文化変容を世界社会のマクロな構造変動との関わりで把握しようとする。第1部「問題提起」では、現代日本社会における「外国人と日本人とが織り成す諸関係」を、「世界社会の分節」間の、つまり「中核—周辺」間のトランスナショナルな関係から捕捉すること、かつ先行研究とは違って、「自らの『生命—生活』の発展的再生産を目指し、それに基づいて社会変動・変革を担う当たり前の『人間』」の「生活過程」から、「文化変容」の問題へと接近することが企図された。

II) この点から、①諸個人の客観的—主体的な「生命—生活」の再生産過程の把握、②現時点の生活過程の生活史的な脈を介しての捕捉、③生活過程における階級・階層的（従って民族・国民・性・世代的）「異質性」と「同質性」の把握、④生活過程の、行為・関係・集団・組織・機関・機能の変化・変動との関連での掌握を目指した。特に「研修生・留学生・就学生の母国と日本の双方を繋ぐ生活過程をトータルに捉える視点」が重視され、中国人企業研修生・農業研修生・国費留学生・私費留学生・就学生、韓国人留学生、インドネシア人留学生、マレーシア人就学生という軸が設定された。しかし、本書の第2部「生活誌分析」を積み重ねることにより、中核となる中国からの研修生・留学生・就学生は、1) 企業研修生、2) 農業研修生、3) 国費・理工系大学院生、4) 文系大学院・私立大学の私費留学生、5) 専門学校私費留学生・日本語学校就学生、へとカテゴライズされてゆく。これらは、「留学生」として一括りがちな人たちの間における、多種・多様な存在形態の発見である。

III) 第2部は本書の中心であり、研修生・留学生・就学生の生活過程が、以下のごとく具体的に分析された。①基本属性と生活史（来日の動機など）、②研修生の生活過程、③留学生・

就学生の生活過程、④研修生・留学生・就学生をめぐる社会諸関係、⑤研修生等の文化葛藤（日本語の習得状況とコミュニケーション、生活習慣の相違、「労働観」の相違、「人間関係観」の相違）、⑥研修生等の社会認識の変容（母国の経済・政治、日本と母国の文化・社会・教育、侵略戦争の歴史認識、など）、⑦研修生等の人生観と将来指向（人生観とその変化、研修・留学・就学の成果、将来指向）。かつ、それぞれのカテゴリーごとの特質が深みをもったモノグラフとして、面接調査に基づくナマの言葉で語られているので、日本側の関係者にも与えるところは大きい。

Ⅳ) 第3部「考察」は、教育人類学の移民・在留民研究などに依拠する「異文化教育学」とは異質の、文化変容論の基礎構築である。そのため著者は、生活過程に根を置き、世界社会の構造変動とも連鎖する「文化変容」過程を、「彼らが必ずしも対象化・自覚化しない暗黙の認知枠のレベル、語られざる心象のレベルにまで踏み込んで読みとって」こうとした。そのさいの鍵概念が「専門性修得」、「異文化（労働観、人間関係観）接触」、留学等に伴う「国家・社会認識変容」である。ここでは、「専門性」の把握を文化変容の端緒に措定し、来日前の属性と専門性修得との関係、専門性修得と異文化接触との関係、異文化接触と国家・社会認識との関係、という積み上げを行った。その結果、国家・社会システムと自己との関係として、農業資源を見直した農業研修生はナショナルな内発性重視になり、企業研修生と国費・理工系大学院生は専門性を重んずるが故にナショナリストからユニバーサリストへと揺れ、日中交流を願う文系大学院生・私立大学の私費留学生はインタナショナルとしての、市民的政治的自由を求めた私費専門学校生・日本語学校就学生はコスモポリタンとしての、対応を取ることが示された。

Ⅴ) 以上のごとく、著者の新たな知見は、[1] 日本で学ぶアジア系外国人の多様な存在形態を明確にし、[2] その各カテゴリーごとの生活過程を具体的に踏査し、外国人留学生等への施策にも示唆を与え、[3] 高等教育機関に学ぶ若い人たち自身の[文化接触-自己変容]を、専門性修得-異文化接触-国家・社会認識変容という連鎖で解明し、[4] 日本の研修企業関係者・農業関係者の側の文化変容をも取り上げ、そのことによって世界社会内のトランスナショナルな新たな関係構築の根拠を提示している。[5] 総じて、生活過程からの文化変容という視座は、新たなる“異文化教育社会学”の誕生を告げるものとなっている。

よって、著者が北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。